

臨床社会学と社会調査

大村 英昭 (関西学院大学社会学部教授)

平成17年度から3年間にわたって、私が代表者を務めた科研費調査「現代人の価値意識と宗教意識の国際比較研究——脱欧入亜の視点から」が今、最終報告書を印刷所にまわして終了しようとしている。代表者といっても量的(アンケート)調査のほうは、もっぱら副代表者の真鍋一史教授にお任せして、私はごく限られた範囲の質的(フィールド)調査を実施したに過ぎない。それでも、こういう国際的なフィールド調査に本格的に関わったのは(なんと60歳を過ぎての)初体験。これまで“アームチェアー・ソシオロジスト”を決め込んできた者としては「へえー、これも結構、面白いねえ……」の感慨にふけっている。とくに50歳を過ぎた頃から「臨床社会学」という以上に「臨床宗教学」の必要性をうたえてきた者としては、なるほどグローバルに現場(フィールド)体験を重ねることが、——しばしば「見ると聞くとは大違い」の実感をともなって——いかに大切なことであるかを思い知った。

あらかじめ用意していた——というより、宗教学界の近年の理論動向から導き出された——仮説群が、量的(アンケート)調査の側からも一定程度、実証されていたことは望外の喜びであった。まずは、同じ宗教性といっても、特定(宗派)宗教によって培われる religiosity と、他方、そういう特定宗教には、むしろ反感すらもっているらしい「宗教的無党派層」が、それゆえに、かえって熱心に希求している spirituality との区分が明瞭にできたこと。かつ、その意味での spirituality で見れば、世界中、少なくとも「世俗都市」の住人の間では、感性レベルの宗教心において、ほとんど差異を見出しがたいまでに、よく似たものになりつつあるのではないか。もっと言えば、仏教であれ、キリスト教であれ、古い教条(ドグマ)は、いずれの文化圏においても次第に人心を失い、

人類学者岩田慶治がいち早く高唱した“ネオ・アニミズム”こそ、特定宗教から脱却した現代人の spirituality の内実を形成しつつあると見て間違いあるまい。

この spirituality の相似的広がりを検証すべく、フィールド調査班が眼をつけたのは2点、1つは火葬後の遺骨灰がどう扱われるか、2つは、大切にしていたペットと死別した際に人々がどんな宗教行動をとるか、であった。まず1つ目のほう。いち早く火葬化が進んだわが国と違って、東アジアだけでなく、ユダヤ＝キリスト教圏でも火葬はむしろ忌避されてきたはず。それが、大都市圏の拡大にともなって、ここ20、30年ほどの間に、どの国でも急速に火葬化が進んでいる。韓国のように政府による、ほとんど強制に近い措置が実行されているところは別にしても、葬儀式の合理的ないし簡素化のすう勢は必然的に火葬率の上昇をもたらしてきた。しかも面白いことに、火葬後の遺骨灰の扱い方から見て、たとえば“散骨葬”の増加に見られるように、どの文化圏でも類似の宗教行動を誘発するようになるのだ。従来、墓参習俗はほとんどないかのように聞いてきたプロテスタント国ですら、近年は、遺灰を収めた記念碑を目当てに花や灯火をもって定期的に訪れるひが増える傾向にある。われわれは、ここにも、religiosity ではない、類似の spirituality が先進国に共有されつつある証拠だと考えた。

もう1つ、ほとんど家族の一員ともなっていた伴侶動物との死別に際して、先進国の都市住民は、ほとんど同様の悲しみを味わい、それゆえに、類似の宗教行動をとることも判ってきた。すなわち日本のペット霊園に見られる祈りの光景は、じつは欧米先進国の多くにおいて見られる光景でもあって、われわれはここにも、同質の spirituality が反映されているものと見做したのである。

見えざる間違いに眼を向けよう

——隠れたエラーをあぶりだせ——

池田 央（立教大学名誉教授）

調査には誤りがつきものである。それは調査の設計から実施、集計、分析に至るまで、種類も多く数え上げればきりが無い。調査の誤りに関しては多くの警告本も出ているが、ここではチェックなしでは、気づかないうちに必ず起こるであろう種類の隠れたエラーについて考えてみたい。取り越し苦労と思われるかも知れないが、私は気になって仕方がないのである。

むかし人手を使って行っていた調査集計作業は、今は計算機のおかげで、ずいぶん楽になった。とはいえ、人手がまったく必要なくなったわけではない。人手が介在するところ常にエラーありと考えたほうがよい。

かつて質問調査が終わると、仕事はその調査票を整理し、回答をワークシートや必要なら数字にコード化してカードに転記したりすることから始まった。作表のため手作業でカードを仕分け分類して数を数えもした。やがてパンチカードに打ち込んだり（今はキーボードか）、コンピュータにかけて計算するのが研究者の仕事となった。何ヵ月もの時間を単調な繰り返し作業に費やしていた。お金があれば外注ということもありえたろうが、貧乏学生はそうした根気のいる仕事をすべて自分で行わなければならない。一度そうした入力計算作業を経験すると、外注するにしても、人任せではどれだけ正確に作業が行われているか、気になって仕方がない。期限に追われるスピード化時代はそうしたエラー発生に拍車をかけるが、他人任せではもう相手の出す結果を信用するより仕方がない。

社会保険庁で、年金記録が誤って記録されていたり、消失していたりということが社会問題になっている。だが、当時担当者たちは何も悪意をもって手抜きをしたわけではなかろう。たんにデータを写し取り、記録するだけでも数が多ければそ

れだけの誤りを犯す可能性があることを示すよい例だと思う。間違いが起こってからでは責任の取りようもなく、間違いが起こらないような仕組み、あるいは起こってもすぐ発見し修正できるような仕組みを作業の中に組み込むことが大切である。

調査で集計結果をまとめ、度数分布表を作るとする。たとえば、結婚した年齢を多くの男女に聞いて集計し、度数分布表にまとめれば、それなりの結果が得られる。ところが結婚した人の年齢が10歳以下の人がいたりすると、これは間違いだとすぐ分かり、原票にあたって確かめることができる。しかし、それだけでは分からないこともある。長子の年齢と母親の年齢をクロス集計してみたところ、母親の年齢とその子どもの年齢差が10歳も変わらないケースが発見されて大慌てしたという話も聞いた。単純集計をただけで見つからなかったようなケースである。

さらに、たとえそうしたエラーが発見されても、集計が終わった段階では間違った場所を見つけだし、修正するのが大変むずかしい。原票まで遡って確かめるのは、時間とコストがかかる。それらを見無視して進めばエラーが蓄積される。気付かないだけの話である。

エラーは初期のうちに発見し、こまめにつぶすのがコツである。そのための手間を惜しんではならない。ちょっとした工夫も大切である。たとえば個票に回答した数値の合計を記入しておく。無回答の個数もメモしておくといよい。ある程度票がまとまった単位ごとに、各質問の集計を行いその合計がメモした合計値の合計や回答総数と一致するかクロスチェックする。こうした地道な積み重ねが、調査には不可欠である。集計された調査データを見て大所高所から大きな議論をするのはそうした苦労のあとである。それに耐えられる人でなければ調査マンはつとまらない。